

三条大橋の補修・修景事業の取組

京都市 建設局 土木管理部 橋りょう健全推進課

1. はじめに

三条大橋は、遠くは室町時代の造営とされており、天正 18 年（1590 年）に豊臣秀吉の命により大改修が行われ、現在に近い形になったと言われている。その後、明治 13 年、大正元年に架替えられており、昭和 25 年に改築され、木製高欄は昭和 49 年に更新されているが、長年の風雨により老朽化が著しい状況にあった。

そこで、歴史、風景の継承に向け、木製高欄等の更新を実施し、良好な景観の再生を図る必要があったが、多額の事業費を確保することが課題であった。

本稿では、ふるさと納税等を活用することで事業費の負担を軽減し、木製高欄の更新だけでなく、舗装や防護柵等の更新も実施することで、橋りょうの健全化と併せて、京都に住む人、訪れる人の満足度を高める良好な景観の再生を図った三条大橋の補修・修景事業の取組等について紹介する。



写真－1 補修・修景事業前の三条大橋

2. 三条大橋の補修・修景事業の概要

(1) 三条大橋の特徴

三条大橋は、木製高欄や桁隠し、高欄の擬宝珠（ぎぼし）など鴨川に架かる橋りょうの中でも特徴的な橋りょうであり、今から430年以上前の天正18年（1590年）に、豊臣秀吉の命による大改修で現在と近い形の橋となり、江戸時代には東海道の西の起点に位置付けられるなど、歴史的背景や鴨川と調和した風景など文化的特性をもつ京都を代表する橋りょうである。

ア．橋梁諸元

場 所：京都市中京区中島町～東山区大橋町

橋 長：73.3m

幅 員：16.7m

上部形式：鋼9径間単純I桁橋（木製高欄、桁隠し）

下部形式：多柱式ラーメン橋脚、直接基礎

イ．木製高欄

親 柱：14本（ $\phi 480 \times 10$ 本， $\phi 420 \times 4$ 本）

木材総量：33.7m³



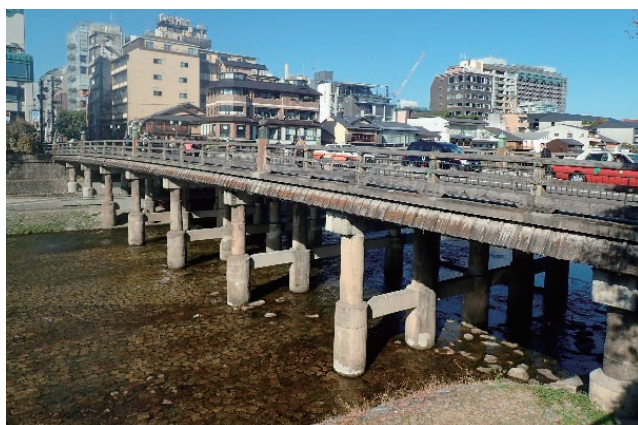
写真－2 木製高欄（昭和49年当時）



図－1 事業箇所図

ウ．擬宝珠

三条大橋の擬宝珠は青銅製で、そのほとんどが天正18年の架設時のものとされており、表面には「京都三条の橋は、後代まで往来する人々の助けとなる。しっかりとした基礎は地中に五尋（約9.1m）の深さまで入り、切石の橋柱は63本ある まさに日本の石橋としては最初のものだろう 天正18年（1590年）の正月の日に豊臣秀吉が世に初めて送り、増田右衛門尉長盛が造営した」という銘文が刻まれている。また、擬宝珠には、幕末の池田屋騒動の時の刀傷が残っていると言われている。



写真－3 橋りょう全景



写真－4 擬宝珠（銘文・刀傷）

(2) 文化と歴史の継承

「三条大橋の補修・修景事業」は、三条大橋の美しい風景を再生するだけでなく、木の文化や歴史を次世代に継承することを目的としており、木製高欄や桁隠しについて、京都市内産のヒノキを用いて元の形を忠実に復元するとともに擬宝珠を再利用している。さらに、木製高欄等の更新に併せて、舗装や防護柵等の更新を実施することで、良好な景観の再生を図るものである

また、補修・修景事業に係る設計と併せて、老朽化修繕及び耐震補強に係る橋桁や床版の補修、下部工の耐震補強の設計検討を行い、今後の補修工事等に影響することが無いよう、補修・修景事業のなかで桁隠し部の断面修復や橋面防水等を行っている。



写真－ 5 補修・修景事業



写真－ 6 補修・修景事業が完了した三条大橋

(3) 地域住民・大学・地元企業等との連携（寄付金の獲得）

ア．概要

高欄、桁隠しなどの木製部材に加えて、舗装及び防護柵の更新等を含めると、当初事業費は、約4億円と想定され、かなり高額であることから、事業になかなか着手できていない状況にあった。

事業を進めるためには、本市の負担を軽減することが不可欠であることから、ふるさと納税等による寄付金を活用することとし、平成30年度から寄付の募集を開始した。

寄付目標額は、当初事業費の1/4の1億円とした。

イ．取組及び結果

寄付の募集に際しては、地域住民・大学・企業など多くの団体から趣旨に賛同いただき、関連商品の販売や事業の認知度向上をゼミの研究テーマとして活動いただくなど、様々な形で事業PRに協力いただいた。

具体的には、地元の若手有志の方々による三条大橋を題材とした寸劇の私鉄駅構内での実施や、京都市交通局、民間バス会社の協力のもと、車内等でのポスター掲示、駅等におけるチラシの配架を実施した。また、市内の大学において、三条大橋の寄付募集PRに関して、ゼミの研究（市町村等の政策の調査）の一環として多くの協力をいただいている。

その他、京友禅のブランドが作成したスマートフォン用の三条大橋が描かれた「おふき」のコンビニ販売や、酒造会社との連携による三条大橋特製ラベルの日本酒の企画や、インスタグラムなどのSNSを活用した広報活動を行った。

これらの取組や協力により、全国の多くの方々から、目標額を上回る寄付を頂くことができた。



写真－7 寄付の募集に係る取組事例

(4) 住民・学識者等の参画（景観に調和したデザイン）

ア．概要

三条大橋の補修・修景事業において、文化都市・京都にふさわしい景観に調和したデザインとするため、住民や学識者が参画する「デザイン検討会議」を設置し、地域的な視点や専門的な見地から意見を頂きデザインを決定した。

イ．取組及び結果

三条大橋の補修・修景事業に係るデザイン検討会議は、市民公募委員及び学識者、地元自治会や地元商店街の方々と構成し、令和3年度に立ち上げたもので合計3回開催した。会議では、三条大橋にふさわしいデザインコンセプトやそれを表現するデザイン等についての活発な議論を経て、舗装ブロックや防護柵などのデザインについて意見を頂いた。

最終的なデザイン案は、「人々を暖かく迎える、みやびな京都の玄関としての橋」、「豊かな歴史と文化を未来に継承する京都らしい橋」、「鴨川、東山などの自然環境になじみ、まちを彩るシンボルとなる橋」、「安心、安全を与え、周辺のまちの魅力向上、発展に資する橋」をコンセプトとし、伝統文化として脈々と引き継がれてきた和柄と伝統色を採用したデザインとなっている。具体的には、歩道舗装は銀鼠色（ぎんねずいろ）の繁栄の意味が込められた市松模様を、歩道と車道の間の防護柵には成長への願いと魔除けの意味が込められた麻の葉模様にすることや、伝統色の檜皮色（ひわだいろ）の柱を設置することなどの意見を頂いた。



写真－8 歩道舗装・防護柵



写真－9 デザイン検討委員会の意見を反映した歩道

(5) 魅力ある夜間景観づくり

ア．概要

本市では、令和元年に「魅力ある夜間景観づくり」に向け、三条大橋を含む5か所のモデル地区で社会実験を行い、京都らしい夜間景観づくりのための指針を取りまとめた。これを踏まえ、本事業においても、京都らしい魅力的な夜間景観の創造に向け、補修・修景事業に併せてライトアップを実施した。

イ．取組及び結果

ライトアップに係るデザインについても、前述のデザイン検討会議で議論いただき、照明色は周辺の光環境と明るさのバランスをとるため暖色系を採用し、橋が鴨川に浮かんでいるようなイメージで木製高欄を照らすという意見を頂いた。この意見を踏まえ、補修・修景事業に併せて照明を設置することで、魅力的な夜間景観を創造した。

なお、ライトアップと併せて、歩道照明についても歩道全体を照らすのではなく、陰影を意識したほんのりした明かりとするため、防護柵の笠木の下面に設置する形としている。



写真－10 ライトアップ状況

3. おわりに

本事業は、令和2年度から設計に着手、令和4年9月から工事を開始し、計画段階から工事実施段階まで、地域住民・大学・企業など多くの方々の協力や全国の多くの方々からの支援により、令和6年1月に無事事業を完了し、多くの関係者に参加いただき完成式典を行うことができた。皆様の協力に感謝し、半世紀ぶりに美しく再生した三条大橋を、これからも大切に維持管理し、未来へ継承していきたい。

今後は、老朽化修繕及び耐震補強を踏まえた、橋桁や床版の補修、下部工の耐震補強を行い、市民や観光客の皆様の安心・安全も確保していきたい。